

災害エスノグラフィーを用いた東日本大震災時の消防団活動実態調査 -釜石市を事例として-

Ethnographical Research on the Volunteer Fire Corps under the Great East Japan Earthquake -Case study at Kamaishi-city-

○重川希志依¹, 田中聡¹, 阿部郁男¹
Kishie SHIGEKAWA¹, Satoshi TANAKA¹ and Ikuo ABE¹

¹常葉大学大学院環境防災研究科
Graduate School of Disaster Research, Tokoha University

At the time of the Great East Japan Earthquake, the Volunteer Fire Corps, who issued victims of 254 people, was responsible for various activities to protect residents' lives and property. A number of reports etc, that recorded the activity situation of the Volunteer Fire Corps at that time have been published. In these reports, however, personal thoughts such as wisdom, ingenuity, troubles and conflicts that each member of the group has overcome the earthquake disaster are hardly recorded. Therefore, this study conducted an ethnography survey targeting Volunteer Fire Corps of Kamaishi-City and found tacit knowledge such as the conflicts that individual members had, and wisdom and ingenuity that was useful in the field to overcome the hardships.

Keywords : Volunteer Fire Corps, the Great East Japan Earthquake, Ethnographical Research

1. はじめに

東日本大震災時において 254 名（うち公務中 198 名）の犠牲者を出した消防団は、住民の生命・財産を守るため多様な活動を担っていた。当時の消防団活動状況を記録した報告書等は多数刊行されているが¹⁾、これらの報告書には一人一人の団員が各々の立場で震災を乗り越えてきた知恵や工夫、あるいは悩みや葛藤など、個人の思いはほとんど記録されていない。

そこで本研究は岩手県釜石市消防団員を対象としたエスノグラフィー調査を実施し、個々の団員が抱える葛藤や、苦境を乗り越えるために現場で役立った知恵や工夫など、震災当時の消防団活動を取りまとめた既往の報告書等では記録されてこなかった暗黙知を抽出し、未曾有の災害に直面した消防団員の経験を広く共有化することを目的とする。

2. 研究の方法

(1) 釜石市消防団の概要

釜石市消防団は、消防団本部ならびに第 1 分団～第 8 分団で構成されており、団員数は定員 800 名のうち実員数は 679 名である(平成 29 年 4 月 1 日)。このうち沿岸部に位置する第 1、3、6、8 分団が津波により甚大な被害を被っており、消防団活動中に 8 名の団員が殉職された。一方、咄嗟の判断でいち早く消防団のポンプ車を高台に避難させていたことから、消防車両等が流されてしまった常備消防に代わり、様々な活動を担っていた。釜石市消防団の分団位置を図 1 に示す。

(2) 調査方法

釜石市防災危機管理課職員に対し、研究の目的と調査方法を説明の後、当時の消防団活動全体を俯瞰できる立場の団員、津波被害による対応の中でも特徴的な活動を行った団員を選定してもらい、調査に同意してもらえた 5 名の団員を対象にエスノグラフィー調査を行った。こ



図 1 釜石市消防団管轄地域²⁾

の聞き取り記録に基づき、以下の分析を実施した。なお、調査概要を表 1 に示す。

3. 調査結果の概要

調査の結果、東日本大震災後の消防団活動には消防団活動の本務といえる活動と、本務以外と考えられる多様な活動を担い、地域住民の生命・財産と、生き延びた住民の震災直後の生活を守るために極めて重要かつ過酷な活動を行っていたことが明らかとなった。本務として考えられる活動には、①地震発生直後の水門閉鎖、②津波からの避難誘導、③消火活動、④行方不明者の捜索があり、また本務以外として考えられる活動には、⑤遺体の火葬場への搬送、⑥避難所の運営指揮、⑦傷病者への対応、⑧防犯警備活動などがあげられる。さらに、生命の危険を顧みず活動せざるを得なかった消防団員としての葛藤や個人の思いが明らかとなった。以下に順を追って発言内容を記述する。

表1 調査の概要

対象者	震災当時の役職	調査実施日時
A氏	消防団本部副団長	2016.8.16.13時30分～16時
B氏	消防団本部分団長	2016.8.16.18時00分～20時30分
C氏	消防団本部副団長	2016.8.16.18時00分～20時30分
D氏	第一分団本部長	2016.8.17.9時～11時30分
E氏	第一分団副本部長	2016.8.17.9時～11時30分

(1)地震発生直後の水門閉鎖

・私は八百屋をやっている、そのときは店にいた。地震が起きたときは地球が割れると思ったもん。そんなくらいに大きかったんですよ。「あーこれだめだ。消防団行かねばね」って言った。「お前ら絶対に津波来っから逃げろよ。ポンプを山さ高台にあげろ」って自分の車で回って行って。門扉閉めたら「すぐ逃げろ」と。

・「水門閉鎖確認しろ」っていう訓練を元々やってた。「まずそれをやろう」っていうことでポンプ車に乗ってサイレンを鳴らして行ったんです。そうしたら閉鎖になってる門扉もあるけど、大きな門扉が後50センチで動かなくなるところに遭遇した。委託された業者は指令・委託されているから完全に閉めないってということで四苦八苦してました。やっぱり使命感を皆持っている。「どうした？」って聞いたら「後50センチぐらい閉まんないんだよねえ」って言うから「いや、そんなことやってらんねえからとにかくもういい。とにかく逃げろ。すぐ逃げろんだぞ」って言うことでわれわれは言ったまんま戻ったんだけどね。その後「流されないで助かったんだ」って後の人たちは私が言ったように逃げたらしいけども。

(2)津波からの避難誘導

・釜石の津波っていうのは町方に過去50センチぐらい膝被るぐらいの津波しか来てないのでそういった経験してるお年寄りが多いんです。で「またそのくらいしか来ないんだろう」ってたぶんそういう考えがあって皆普通に歩いてるんです。結構普通に歩いてるような感じなんです。われわれは必死でとにかくそこばかりにいられないんで、とにかく自分たちの管轄内のところを限なくサイレン鳴らして。そこで私ふと思ったのは「避難して下さい」っていう綺麗な言葉で言っても避難しないんだよね。「あっ」と自分はそう思って「逃げろー、大津波来る。津波来たぞ」っていうような大きな声を出したら「あっ、やっぱりこれは大変なことなんだな」って思った人は走って逃げるんです。半纏を着た人間が「逃げろ」って走って逃げれば「皆も消防団員が逃げた」と大変なことだって逃げるのかなあと思ったり。

・家の前で立ったまま動かないおばあちゃんがいた。足腰悪いおばあちゃん「これ、駄目だ。とにかくポンプ車に乗せて高台に行かなくや大変なことになる」ってことで、最後におばあちゃんをポンプ車に乗せて仙寿院っていうお寺さんに上がった。当時E副部長も同席だったので最後におばあちゃんを乗せて上に上がった。われわれが消防団として与えられた仕事はやっぱりやんなきゃないっていうことで。E副部長が「いや、部長もう限界だ。われわれも逃げましょう」と。それでも一人でも二人でも助けなきゃいけないっていう気持ちは私にはあったんだけどどうしても副部長がもう判断で「もう限界だ。ここであがなきゃわれわれも死んでしまう」っていうことで、まず「じゃあ、そうするべ」っていうことであがって間もなく津波来た。

(3)消火活動

・避難して間もなく仙寿院のすぐ下のところから火が出てきたんです。見ているうちにだんだん煙が大きくなってきて、副団長と話して消すって言っても結局ポンプが停止してるもんだから。でも火はどんどん出てくるし、団員が4・5名ぐらい仙寿院にいたもんだから「まず何とか近くに消火栓があるから一旦やってみましょう」ってポンプ作動したら水上がって来たんです。ただ、火点まで瓦礫が凄いでその瓦礫の山をホースを延長して、やったら水上がってきたのでなんとか仙寿院の真下の火災は止めたんです。安堵したけど伸ばしたホースを撤収するっていうことは不可能。もう捨てるしかないんです。穴も開いてしまってるし。火を見逃してしまうと火災で殆ど建物が無い状況になってしまうので、4・5名の団員でそこ消して安堵した。

・消防署の方から「火を消してくれ」というお願いが無線であつたわけなんです。釜石消防署のポンプ車・救急車は殆ど壊滅状態で流されたわけ。火消すっていうのはうち(消防団)のポンプ車一台しか動かせなかったんで「ホースは消防署員が火点まで担いで持って行くからなんとか火を消してくれ」ってお願いされたもんだから。「じゃあ、まずやるだけやりましょう」っていうことで、防火水槽までポンプ車を持って行ってそこからあるだけのホースを延長して。避難してる薬師公園の方角にある三階建ての建物が燃えてるって。「まずその火消さない」とっていうことで殆ど一昼夜、朝方までかかってその火を鎮火させたんです。だから釜石の消防団で水をあげて火を消したっていうのは第1分団3部の一台だけのポンプでこの町の火を消したんです。たった4・5名で火を消した。

・釜石の火事が少なかったのが1分団の初期消火が早かったから。それが無ければ釜石も大火。間違いなく。二・三ヶ所で火の手が上がって、それが全て初期消火で対応出来た。助かった。あれ燃えたら終わりだもんな。消防団の活動記録の中にもそういう記載はないです。そういう影でしかやってねえ活動だから市長すら分かんねかったんだから。市長も後からだよな。うちの部で二ヶ所から火が出たの消したっていうのは市長でも分かんねえ。

(4)行方不明者の捜索

・「瓦礫、あのままでええんか」「あの中に遺体があんじゃねえか」「何人もまだ行方不明だ」「このまま腐らかしていいか」と、相談に来たんですよ。「自衛隊、警察来るの待っていいか」と。機械は土建業やってるやつが「内陸部からおれが借りてくるから、金だけなんとかしてくれねえか」「オペレーターはおれらがやる」といって来て。当初は山の竹を切ってきて、瓦礫をどけてみましたがどうにもなんねえ。今度は市長に「市長このまんま自衛隊、警察、よその応援待ってても手が回んねえ」「われわれ住民で捜索隊を結成すつからリース代、必要経費出してもらえますか」ったら、市長は「それはその通りだ、やれるんだったらやって欲しい、あとで請求書だけ持って」つうんで。機械を2機借りて、毎日番割りを作って1ヶ月以上やって。機械を壊したり、いろいろ割ったりしながらやりました。それで機械のリース代が毎日捜索で出た方々に日当いささかでも払えることができたんですよ。ですからそんなに傷まないうちに見つけることができたんですよ。自衛隊のこと待ってたんじゃ、半年も無理だと思えますよ。

(5)遺体の火葬場への搬送

・釜石で火葬しきれないわけ。1日に10体もできなかつた。ほんで秋田の方さ持って行った。秋田とか内陸にはかわりばんこに4分団・5分団・7分団で順番に行かせて。遺体を業者のトレーラーに積んでトレーラーを先導する感じで消防団のポンプ車が先頭に立って赤灯を点けて。緊急車両としてサイレン鳴らしてさ。本当は駄目なんだともさ。そのトレーラーの後ろには家族の車がついて来たりしてさ。そして県外へ出て行ったの。そのときは常備消防は来ず、釜石の消防団だけ。

・毎日遺体搬送させたの。1日交代でね。あれは酷かったな。気の毒で。だけど気の毒でもしょうがないもんな。仕方ないんだもんな。指示する立場では。最初の頃はまだ腐敗していないからいいんだけど何日か経つとやっぱり臭いが強くなる。そして窓もほとんどなかったりとかさ。それを毎日毎日やらせられるんだもん、地図を脇に入れて。気の毒だから遺体行ったなら次の日休ませる。交代しながらやらんと。皆無口になるな。

・遺体の搬送とか運搬するのは元々計画には無いわけですよ。俺たちの仕事でねえのさ。団長が役所の人間から言われて来んです。誰もやる人がいないから自然とそういうね。かなり諸々の仕事が全部回ってきちゃって。でもやるしかないっていうか。上の団長の指示命令だから。もう団長がそれ受けて来て団としてこれをやると決まったら「それはやるんだ」と。「俺の仕事じゃねえ」って文句いう人もいるけども、だけどそれでも結果としてはやるしかない。

(6) 避難所の運営指揮

・全員を収容できなかった、それで、親戚や知人友人、とにかくよそに行ってお世話になれる人はそっちに行ってお世話になろうと。ほんで部屋を二つに、男女に分けて入りましょうと。あとは電気がなかったんで、ろうそくをなんかどっさりもらったような、それから灯油だとか、でもちょっと動けば胸が苦しくなる、それを我慢しながらやってみましたね。

・とにかく皆さんに声掛けしてまず毛布・反射板のストープ。「なんとか助けて下さい。ある方はとにかく家に戻って持って来てもらえねえべか」っていうようなお願いをして快く持ってくる人たちが結構いた。まず暖を取ることを気になって声掛けしてたんです。

・毎日朝は消防団員からはじめ仙寿院に避難した有志一同、リヤカーの小さいやつを拾ってきてそれに瓦礫を積んで仙寿院まで持って来て毎日ドラム缶に入れて火を焚いた。それからラジオ体操やってっていう1日。ご老人たちにエコノミー症候群ってありますよね。「これじゃ駄目だ」って言って、消防ポンプ車のラジオの音をマイクで拾ってスピーカーから流して毎朝ラジオ体操。「自衛隊が来るまで何日だ？二日で来れるのか？三日で来れるのか？」ってそれまでは何とか歯喰いしばって食料・水関連を何とかしなきゃねえなっていうことで皆で色々知恵を出し合ったり。

(7) 傷病者への対応

・薬を飲んでる方々がいたんです。慢性病、血圧の薬とか。いつも飲んでる薬の名前聞いたって、全然わからない。ただ、何の病の薬かだけを聞いて、私は17人分の薬を、なんとかかさんは何の薬を飲んでますと、書き取ってから行ったんです。県立病院に行ったら薬は出せませんと。岩手県の医療局に衛星電話で掛け合って、協議してから出しますからと。協議もへったくれも、いまそこに薬を飲まなきゃだめだっていう人がいるのに。そしたら2日分だけ出しますと、ただし現金で払ってってください

いと。たまたま現金、4、5万は持ってましたが、保険証がないんで保険が適用しないから原価で払っていけど。17人分の薬代を払って薬もらって、そして皆さんにプレゼントだと言って渡しました。薬を17人分持っていったら、ほんとにもう神様扱い。

・糖尿病でインスリンを3日打ってないっていう人がいました。死んじゃう死んじゃうっていう人を車に乗けて、病院に向かいました。車も自分のだけだったんですが、すっかりずぶ濡れになって来た人を車でヒーターかけたまま乗ってガソリンがわずかだったんですよ。いやいや。まあ大変でした。

(8) 防犯警備活動

・道路が走れるようになったら今度は盗難が起きていると。色んな治安が悪くなって変な人が立ち寄って物色してるっていうことも聞いたし周りに警察がいるわけでない。「じゃあ、何やる？」って言えば「消防団しかいないから」って。今度は毎晩巡回する。ゴーストタウン、真っ暗なところ電気も何もまだ通ってない。自分の身を守るものを持ちながらサーチライトで照らしながら、金属バット・ゴルフクラブ拾ってきて消防ポンプに積んで。攻撃される覚悟しないとね。じゃねえと命守れなかった。相手も必死だから。金庫荒したりね。全然、警察署のパトカーなんて来なかったからね。来れる手立ても無いしね。警察署もやられたから。

(9) 葛藤や個人の思い

1) 団員の命

・消防団は津波のあとに退避ルールを作りましたが、釜石市消防団は時間を入れませんでした。ちなみに釜石市消防署は津波到達30分前には海岸から引き上げると決めています。住民に最も身近な消防団が逃げることによって住民も逃げると。消防団はそれを、何度も何度も議論しました。いま助けられる命がそこにあるのに、30分経ちました、だからもうその人は置いてわれわれは先に避難しようっていうわけにいくかと。それは無理でしょうと。そんなことは人としてできるかと。マスコミの方々ルールは作りましたか？って聞きます。簡単に作れるもんじゃないですね。われわれ釜石は現場の責任者に任せることにしました。まずは危険を察したら逃げろと。簡単に言いますと、あとは現場で判断しろということです。

・普通の人がこういう半纏来てるわけですよ。スーパーマンがマント来てるわけじゃないんです。だからそれを考えるとそうやって消防団も生き残らないと今度守る人がいなくなってしまうのでやっぱり「命あって初めて人を守れる」っていう。だから震災後は「とにかく最短な活動をして逃げろ。生き延びろ。自分の命を守れ」とそういうことを団員には皆話してる。消防活動をおろそかにしろっていうことじゃなくて自分が生き延びてそれから地域を守れ。生き延びねば誰も守る人がいなくなってしまう。消防団壊滅してしまうと誰かがポンプを動かして火災を消す？だからそういう考え方でいこうと。

・それもこれも生きた・流されずに命が助かってるからできたっていうのは、このE氏の判断の賜物かなと。生きてれば何でもできる。死んでしまうとその活動ができなかった。まして部のトップが亡くなれば指示する人がいなくなるわけだから如何に消防団も逃げて命助かることが一番の活動なんだと。それを教えてくれたのがE氏だっていう。私は昔からの考え方しかなない。

・震災直後は大丈夫だったんですが、2年経過して、3年目を迎えるという辺りから、全然寝れなくなったんです

よ。警察とか自衛隊は悲惨な現場の中で活動して、それなりの心のケアは受けられましたが、消防団はいっぺん県の施設で大学の先生が来て、「心にこういうその負担といえますか、悲惨な現場で遺体を収容したり搬送したり、いろいろあったものですから、心の病になりますよ」ってというような説明は受けたものの、あとは何もなかったんですよ、心のケアは消防団に対しては残念ながら。

2) 家族との間

・うちの団長は正義感が強いんです、自分を顧みずいく。結局、正義感と命は背中合わせです。だから正義感を持てる人程命を落としやすいです。私臆病なんです。その地震、私たまたまその日は仕事休みでうちにいました。水門閉鎖確認に行かなきゃと思って屯所に行こうとしたら女房に手引っ張られて今行ったら死ぬと。何メーターか分からないけど「凄いな津波が来るな」ともう直感しました。

・私も家も流されたので、この40数年消防団やってるんだけど初めてだね。家族で泣かれたのは。「何でそこまでお父さんやんなきゃないの？もうたくさんだ。辞めてくれ。お父さんは家族ぶん投げて人のためにやってるでしょ。私たち残された家族はどうなるの？」とそう言われたときは「は～、なるほどなあ」って。初めてだね。家族で泣かれて袖引っ張られたの。だから「あ～、もう辞めるべきなのかな」。

・釜石の消防団、この震災のあとに40人近い団員が一挙に退団したんですよ、家族の反対で。いま残ってるのは家族の反対があってもやる気のあるやつらです。

4. まとめと考察

本研究の結果明らかとなった、東日本大震災に直面した消防団員が果たした役割や、個々の消防団員が抱える葛藤、現場で役立った知恵や工夫などを以下にまとめる。

1) 消防の常備化が進んだ我が国において、消防団は、平常時には常備消防の補完的な役割を果たす場合が多い。しかしながら東日本大震災のように極めて大規模な災害時には、消防団単独で同時多発火災の消火活動に成功し、市街地を延焼火災から守り抜いていた。また津波からの避難誘導や逃げ遅れ者の救助、行方不明者の捜索など多くの場面で、常備消防と変わらぬ役割を担い、常備消防と変わらぬ成果をあげていた。

2) 消火活動や行方不明者の捜索活動など、消防団の本務である活動に加え、不足する薬の緊急調達や遺体の火葬場への搬送、防犯警備活動、燃料の調達、避難所の運営指揮など、事前に想定されていない多様な活動に当たっていた。

3) 遺体の火葬場への搬送に代表される、誰も担い手のいないような業務を、消防団が黙々とこなしていた。同時に、過酷な任に当たっていた団員に対し、その後十分なケアが実施されることはなく、長期にわたり苦しむ団員が存在している。

4) 団員の生命・安全を守るため、東日本大震災以降、水門閉鎖活動の在り方や津波からの退避ルールなどが検討されてきた。しかしながら消防団員にとっては未だに簡単に割り切って考えられる問題ではなく、「自分の命」「助けるべき人の命」「家族の存在」の間で多くの葛藤を抱えている。

5) 消防・防災の専門的な知識を有し通常から訓練を積む団員であるが、避難所となった場所で逃げ込んだ住民への的確な呼びかけ、周辺地域への協力依頼、対外交渉な

ど消防の知識のみならず、人間力が非常に高い人材が多く存在していることが明らかとなった。消防団員には、消防・防災のリーダーとしての役割以上に、多様な場面で地域住民を率先する力を有していると考えられる。

参考文献

1) 例えば「東日本大震災 - 釜石市消防団活動記録 - ふるさとを守る, 釜石市消防団」など

2) http://www.city.kamaishi.iwate.jp/kurasu/shobo/shobodan/detail/1190916_2173.html

謝辞

本研究を実施するにあたり、釜石市防災危機管理課職員の皆様、釜石市消防団の皆様にご多大なるご協力をいただきました。ここに記して深く感謝申し上げます。また本研究は、平成29年度科学研究費助成事業「津波による犠牲者はなぜ発生したのか？質的調査に基づくメカニズムの解明」(研究代表者：重川希志依)の成果を含むものです。